

第五十七回

花影会



令和7年5月31日(土)

二十五世観世左近記念
観世能楽堂

番組

13:00

屋

島

武田 祥照
武田 友志

能

村瀬 慧
福王 知登
矢野 昌平

弓流
奈須與市語

野村 裕基

原岡 一之
大倉源次郎

栗林 祐輔

山階彌右衛門
武田 宗和

久田 勘吉郎
佐川 勝貴
武田 宗典
坂井 音晴

坂井 音隆
坂口 貴信
観世 清和
観世 三郎太

15:10頃

頼

政

仕舞

観世 清和

久田 勘吉郎
坂口 貴信
岡 久広
坂井 音晴

狂言

清水座頭

野村 万作

内藤 連

舞囃子

船弁慶

武田 宗典

原岡 一之
大倉伶士郎

林 雄一郎
杉 信太郎

松木 崇俊
杉浦悠一朗

坂井 音隆
松木 千俊
清水 義也

—— 休憩二十分 ——

能

16:10頃

大原御幸

宝生 常三

館田 善博

則久 英志
梅村 昌功

飯田 豪

野村 昌司
武田 尚浩

國川 純
曾和 正博

杉 信太郎

小早川 泰輝

松木 千俊

坂井 音雅

岡 久広

清水 義也

武田 志房

附祝言

終了予定十八時



能 屋島

弓流 奈須與市語（やしま ゆみながし なすのよいちのかたり）

解説

本日の上演曲は、すべて『平家物語』にちなむ作品です。『平家物語』は平安時代末期の平家の興隆と滅亡までを仏教的な無常観に基づいて描きます。成立過程には諸説がありますが、『平家物語』は現代に至るまで広く愛され、多くの文学や芸能に影響を与えてきました。そういった芸能の中でも能は早い時代から『平家物語』を取り込んでいました。しかし、どのように『平家物語』を素材として扱っているかは作品ごとに異なります。本日は、さまざまな味わいの『平家物語』の能狂言をお楽しみください。

能〈屋島〉は世阿弥の作とみなされています。世阿弥の芸談書『申楽談儀』には「通盛・忠度・義経三番、修羅がかりにはよき能なり」と見え、この「義経」が〈屋島〉と考えられ、世阿弥の自信作であったようです。

『平家物語』巻十一「継信最期・奈須与一・弓流」等を素材としています。これらをそのまま舞台化するのではなく、〈屋島〉は亡霊が夢に現れて自らの過去（屋島合戦の出来事）を語り再現する「夢幻能」の形式になっているのが特徴です。

〈屋島〉で義経の霊が語るののは、前半では三保谷と景清の鍛（しころ）（兜の首周り）引き、佐藤継信と菊王の討死、後半は弓流です。さらに今回は特別な間狂言「奈須與市語」が入り、『平家物語』屋島合戦のよく知られた場面がほぼ揃うことになります。常の〈屋島〉では、狂言方の演じる浦の男は鍛引きの話のみを語りますが、「奈須與市語」に変わると、浦の男は与市・義経・後藤兵衛実基・語り手の四役を、仕方を伴って語り分けます。狂言方にとって大事にされている演目です。

続けて本日の小書（特別演出）「弓流」も紹介しておきましょう。通常の弓流しの場面ではシテは床机に腰を掛けたままですが、「弓流」になると、シテは扇を弓に見立て、海に弓を落とす動きを見せます。橋掛りが海の広がりを表します。「弓流」も非常に大切にされている小書です。

〈屋島〉は屋島合戦の出来事を通して、修羅道に落ちた義経自身の心に焦点が当てられています。屋島は平家の拠点でしたが、義経は暴風雨を物ともせず船で四国に渡り屋島に奇襲をかけます。結果、平家は戦いに敗れ、一気に壇ノ浦での滅亡へと向かっていきます。屋島合戦は、義経にとって忘れ得ぬ大切な戦いになったはずです。それでも、〈屋島〉の義経の霊は「弓矢を取って私なし、しかれども佳名は未だ半ばな

⑤老人と漁夫の中入り（一旦、退場すること）

詳しい話に驚いた僧が老人に名を尋ねると、義経の名をほめかし、夜の夢を覚ますなど言い残し、老人と漁夫は姿を消しました。

⑥浦の男（アイ）の語りと僧とのやりとり

浦の男が現れ、奈須与市が扇的の見事に射抜いた物語を仕方話に語ります。男は先の老人は義経の亡心であろうと言い、僧に逗留を勧め立ち去ります。

⑦僧の夢待ち

夜が更け、僧たちは夢を待ちます。

⑧義経の霊（後シテ）の登場

甲冑姿の義経の亡霊が現れ、現世への妄執ゆえにこの世に戻ってきたと言います。

⑨義経の霊と僧とのやりとり

空には澄み切った月。義経の霊は今も西海の波に漂い、現世の迷いの海に沈んでいると訴え、屋島の戦いの物語を語り始めます。

⑩義経の霊の語り

思い出されるのは昔の春。月も今宵のように冴えていました……。

船の平家に向かって、源氏が馬を海へ乗り入れたその時、義経は弓を落してしまいます。遙かに流れていく弓を敵に奪われまいと、義経は馬を泳がせ敵の船まで近づきます。船を寄せ、熊手で狙う敵。義経は熊手を切り払い、弓を取り返して渚に上がります。家来の増尾兼房が諫めると、義経は「武士たる者の名は末代まで残るものだ」と答え、皆感涙を流したのでした。

義経が惜しんだのは名誉。惜しまなかったのは命。身を捨ててこそ後世に名を残すことになるのです。

⑪修羅道の戦い、結末

修羅の刻限になり、義経の霊は修羅道の憤怒のさまを見せます（「カケリ」）。能登守教経が敵とわかると、壇ノ浦の戦いを思い出します。生き死にを繰り返しながら、屋島の海・山・空が一体となった修羅道の戦いの様子を見せます。やがて夜が明けてゆくと、敵と見えていたのは鷗の群れ、関（とき）の声と聞こえたのは浦風。浦には朝の嵐が吹きつけているだけでした。

らず」と、自身の武名は未だ成っていない、だからこそ敵に弱弓を知られるのが無念である

と、弓を取りに行った理由を語ります。弓流しの締めくくりにも、武勇者としての名を重んじる語があります。名誉へのこだわりという妄執ゆえに、死後も西海の波に漂い「生死の海」に沈み、この世に戻って来ては修羅道の戦いの有様を見せることになっているのかもしれませんが。作者世阿弥は、鍛引きの豪快な話や義経の勇姿だけでなく、苦しみの根源とわかつてはいても、武名に執着せざるをえない心を描くことで、戦いのむなしさや無常を描きたかったのではないでしょうか。

結末の修羅道の戦闘がパノラマのように壮大に展開する場面では、義経はどこかに戦いに生きがいを見出しているようにも思われます。しかし、夜明けと共にすべては消え去ってしまうのです。〈屋島〉は〈田村・箴〉とともに「勝修羅」に分類されますが、一抹の寂寥感（せきりょうかん）も漂っています。

舞台展開

①旅の僧（ワキ）と供の僧（ワキツレ）の登場

春の日。都の僧が供の僧を連れて、船で讃岐国屋島の浦（香川県高松市）を訪れ、塩屋に宿を借りることにします。

②老人（前シテ）と漁夫（ツレ）の登場

霞がたちこめる夕暮れ。塩屋の主の老人と若い漁夫が仕事を終えて、釣竿を担いで帰って来ます。橋掛りが海辺の道。

③僧と漁夫、老人のやりとり

僧が宿をぞうと、若い漁夫が老人に取り次ぎます。はじめ老人は断りますが、僧が都からやって来た」と聞くと、懐かしさから宿を貸すことにします。本舞台は塩屋の中。

④老人の語り

僧の求めに応じて老人は、総大将源義経の立派な大将ぶりがまるで今のこのように思い出されると言い、元暦元年三月十八日の屋島合戦を語り始めます……。

先陣をきった源氏方の三保谷の四郎と、平家の悪七兵衛景清の戦い。三保谷が汀に退くと、景清が跡を追いかけて、三保谷の兜の鍛（しころ）（兜の首周り）を掴み、後ろへ引つ張ります。三保谷は逃れようと前に引き、お互いに引き合い、ついに鍛が引きちぎれ、二人は左右へばつと退いたのです。これを見ていた義経が汀に馬を寄せると、敵が義経を狙い、義経をかばった佐藤継信が能登守教経の矢に射抜かれ、継信の首を採ろうとした菊王も討たれます。これを機に平家は船で沖へ、源氏は陣に退いたのでした。



仕舞 頼政

（よりまさ）

解説

仕舞は、能一曲の見どころを地謡のみ合わせて舞う上演形態です。能〈頼政〉の前半では、宇治を訪れた僧の前に老人が現れ、宇治川合戦で源頼政が自害した平等院「扇の芝」に導き、自らを頼政の幽霊と明かし消え失せます。

仕舞は能の後半です。頼政の霊が宇治川合戦の様子を語ります。平等院にたて籠る頼政軍と、川を挟んで対峙する平家軍。平家方の田原又太郎忠綱が馬を揃え、川へ乗り込みます。忠綱の指揮で敵は一騎も流されず上陸し攻めてきました。敵も味方も入り乱れる戦いです。この場面では床机に腰を掛けたまま力強い謡に合わせて袖を巻き上げたり、扇を扱ったりする所作をします。特に足拍子は効果的に用いられます。総大将として全体を見渡し、兵を指揮するようにも見えます。最期に霊は芝の上に扇を敷き、辞世を詠み自害した様を見せ消え失せました。

〈頼政〉は『平家物語』巻四「橋合戦」「宮御最期」を素材とした、世阿弥の作品。



狂言 清水座頭

（きよみずざとう）

解説

『平家物語』は、琵琶法師と呼ばれる盲人が琵琶を奏てながら語ることで広まりました。彼らが語る『平家物語』は、「平家」「平曲」と呼ばれます。狂言〈清水座頭〉には、その「平家」を語る座頭が登場します。もう一人の登場人物の替女（こぜ）は盲目の女性で、楽器の演奏や歌を謡うなどの芸を披露することがありました。座頭の平家（平曲）と替女の小歌が聞きどころです。ただ座頭の語る平家は、一ノ谷の合戦を語るときや狂言らしい内容になっています。

清水寺の観音の導きで縁を結んだ二人は、きつと末永く仲睦まじく添い遂げるのでしょう。しみじとした余韻の漂う作品です。

舞台展開

①三年前に目を患い替女（アド）となった女が、将来を案じ配偶者を得る願いをかねに清水寺へ向かいます。替女は清水の観音にお参りをし、今夜は御堂に籠ることに

します。

②座頭（シテ）が妻を娶（めと）ろうと思い、清水寺へ向かいます。犬に吠えられ苦

勞の末、到着。参詣をし、御堂へ入ります。

③大勢の参詣者であふれた御堂の中。座頭は瞽女にぶつかってしまっています。互いに相手の不注意を言い合いますが、目の不自由な者同士とわかり、心安く言葉を交わします。

④二人は座頭の持参した酒を酌み交わすと、座頭は「平家」を語り、瞽女が小歌を謡います。

⑤やがて夜が更け、二人はまどろむことにします。

⑥瞽女は、西門に行って待ってあればふさわしい相手にめぐり逢えるというお告げを夢に見ます。早速、西門に向かいます。

⑦座頭も起き上がり、西門にいる女が妻になるという夢を見たと言い、西門に向かいます。

⑧清水寺の西門。座頭は杖で辺りを探ります。瞽女も杖で探り……。

舞囃子 船弁慶（ふなべんけい）

解説

舞囃子は、一曲の見どころを囃子に合わせて舞う上演形態です。《船弁慶》前半は、源平合戦後に兄源頼朝と不仲となった義経が都を逃れ、大物の浦で恋人静御前と別れる物語です。

後半は場面と雰囲気が変わり、義経と武蔵坊弁慶たちが舟に乗り西の海へと逃れていきます。しかし風が吹き、海が荒れ、壇ノ浦で滅んだはずの平家一門の姿が海上に浮かび上がります。その中から平知盛（たいらのとももり）の怨霊が襲いかかります。義経は太刀を抜いて対抗し、弁慶が呪文を唱えて怨霊を退散させたのです。この戦いの様子が舞囃子で舞われます。シテは怨霊。その長刀の技が見どころです。舞台向かって右手に義経たちの乗っている舟を想像すると、怨霊が迫ったり退いたりする動きがよりわかりやすくなると思います。

『平家物語』巻十二「判官都落」に義経が怨霊に襲撃された話は出てきませんが、暴風には遭遇しており、その波風の激しさを「平家の怨霊ゆえ」と記しています。観世信光作。

羨望や争いから生まれた怒りや憎しみ、悲しみ、すべての感情を味わってきました。そして、今は一途に平家一門の菩提を仏に願う暮らしを送っています。女院の心の内には、寂しくも清らかで静かな思いが広がっているのでしょうか。女院は品位の求められる役であり、《定家・楊貴妃》と共に「三婦人」と称されています。謡中心の大曲、位の重い作品として、上演の稀な作品でもあります。『平家物語』尽くしの番組の締めくくりにふさわしい作品といえるでしょう。

舞台展開

①後見が引廻しの掛かる大藁屋の作り物を一臺台の上に据えます。女院の庵です。

②臣下（ワキツレ）と従者（アイ）の登場

後白河法皇の臣下が現れ、経緯を述べます。長門国早鞆の沖（壇ノ浦）で入水した女院（建礼門院）は助けられ、その後は都に住まわれるはずでした。しかし女院は安徳天皇と二位の尼（女院の母）の菩提を弔うため、大原の寂光院に出家隠棲されていました。このたび法皇が寂光院に御幸をされることになったと臣下は述べ、道を整え清めるように従者に命じます。

③女院（シテ）と阿波内侍（あわのないし）（ツレ）・大納言局（だいなごんのつばね）（ツレ）の登場

場面は大原寂光院。大藁屋の引廻しが下げられ、中央に女院、向かって右に大納言局（ツレ）、左に阿波内侍（ツレ）が見えます。庵に青鳥が絡まります。山里の寂しい暮らしに訪れる人もなく、涙にくれる日々を送っています。

④女院と局の中入り
女院は仏に供える櫛を摘みに山の奥へ登っていき、局が供をします。内侍は庵に残ります。

⑤後白河法皇の到着
「一声（いつせい）」の囃子で、万里小路中納言（ワキ）を従えた後白河法皇（ツレ）が輿舁（こしかき）（ワキツレ）の担ぐ輿に乗り、大原に向かいます。夏草茂る寂光院の庭。柳の枝は風に、池の水草は波に揺れ、池の周りには山吹が咲き乱れています。法皇は池の様子を歌に詠むと、庵に目をやり、その寂しい有様に胸をうつたれるのです。

⑥中納言・法皇と内侍のやりとり
中納言が庵に声を掛け、法皇の御幸を言います。応対に出た内侍は、自分は信西（後白河法皇の近臣）の娘と明かし、女院は山へ花を摘みに出ていると答えます。法皇

能 大原御幸（おほらごこう）

解説

『平家物語』の中には巻十二の後に「灌頂巻（かんじょうのまき）」という結びの巻を持つものがあります。この巻では、建礼門院（能では女院と称されます）が出家往生するまでが語られます。建礼門院は平清盛の娘徳子のこと。高倉天皇の中宮となり、安徳天皇を生みました。壇ノ浦の戦いにて入水するも源氏の兵に引き上げられ、出家し大原（京都市、比叡山北西の麓）に隠棲します。そこへ後白河法皇が御幸をします。能《大原御幸》は、その一日を『平家物語』から切り出して描きます。

建礼門院は『平家物語』本編での登場はけっして多くはないのですが、灌頂巻は彼女が主役です。灌頂巻「六道之沙汰」で、建礼門院は法皇に自らの体験を六道（天上・人間・修羅・畜生・餓鬼・地獄の世界。これらの世界を自らの罪によって輪廻する）になぞらえて語ります。《大原御幸》においても、この場面は見どころ、聞きどころです。

《大原御幸》は「灌頂巻」の言葉を数多く、かつ巧みに取り入れています。『平家物語』で寂光院を見た法皇が歌を詠む場面の風景描写は、《大原御幸》で女院が山を下りながら見た風景にも転用されています。二人が見た風景の重なりを思わせます。《大原御幸》の女院の山下りの場面は、女院と地謡の掛け合いから始まり、寂光院の周りの風景に女院が目を遣るたびに、女院の心に様々な思いが湧いているようにも見えます。この場面には、謡に合わせて遠くや下を見る所作があります。また、女院が臍の清水に映る月影に法皇をたとえ、その御心をありがたく思うさまは、じつと下の水の流れを見つめる所作で表現されます。謡が中心の作品ですが、心情を伝える効果的な所作が際立つ場面が設定されています。

作者としては、世阿弥の女婿金春禅竹の可能性があがっています。室町時代には成立していましたが、長らく上演記録はなく、江戸時代初めまでは謡物としてのみ謡われていたようです。徳川将軍綱吉の頃に能として上演されるようになり、江戸時代中頃の観世大夫元章は《大原御幸》にいくつか改訂をしたとされます。例えば作り物（舞台装置）の常の藁屋を大きな藁屋に変えたとの指摘があります。引廻しを下げると、佗しい藁屋に美しい尼君が三人並んで見えるという意外性を狙った改変なのかもしれません。また装束では、女院たちの花帽子の白さが印象的に映ります。花帽子に覆われた女面にも注目してみてください。

建礼門院は生きながら六道を廻り、我が子を眼前で失った母でもあります。人々の

は女院の帰りを待つことにします。

⑥女院と局の帰途

女院は安徳天皇の面影を忍び、一門の成仏を願いつつ山路を下ります。すると庵の辺りから人の声が聞こえます。橋掛りは山路です。

⑦内侍と法皇のやりとり、女院の述懐

内侍は法皇に女院がちょうど山路を下っていることを教え、女院には法皇の御幸を伝えます。女院は、今の身の上を恥ずかしく思いながらも、法皇の御幸が昔を思い出させると懐かしみ、法皇の御心をありがたく思うのです。

⑧女院と局の帰途。

二人は御幸に驚き、恐れ多く思います。季節は夏の賀茂祭の頃。明るい日の光が松の枝を照らし、池には藤の花、青葉の蔭には遅桜が見えます。

⑨女院と法皇の対面、女院の語り

女院が感謝を述べると、法皇は六道の有様を語るようになります。女院は、天皇の母として天上に昇ったような暮らしから一転運命が変わり、生きながら六道世界をめぐるたと語り始めます。

都を落ちのびた平家は西の海を船でさまよい、海水は飲めず、まるで餓鬼道のような有様。荒磯で船が転覆するのではないかと人々が泣き叫ぶ声は、地獄に堕ちた罪人のあげる声のよう。陸地の合戦を見た時は修羅道の戦いを、馬の蹄の音を聞けば畜生道の有様を思いました。これらはすべて人間世界での苦しみ。憂いを尽した果てに、今の私の悲しみがあるのです……。

⑩女院の語り。結末。

さらに法皇が安徳天皇の最期を尋ね、女院は語ります。

長門国早鞆の沖。もはやこれまでとなった平家。能登守教経や新中納言知盛は海に飛び入りました。二位の尼は安徳天皇の手を取り船端に立ち、極楽世界という所が波の下にあるので、そこへお連れすると天皇に声を掛けて共に入水されたのです。自らも続いて入水したのですが、源氏の武士に引き上げられました。生きていても甲斐のない命を長らえ、再び法皇様とお目にかかり、涙にくれるのは恥ずかしいこと……。

臣下が帰洛の時刻を告げ、法皇は寂光院を出立します。女院は柴の戸にたたずみ、その跡を見送ると庵室に入られたのです。

（中司由起子 法政大学能楽研究所兼任所員）

〈次回予告〉

—第58回 花影会— 令和8年5月31日(日)13時開演

能「仲光」武田文志

ツレ/満仲 武田友志 子方/美女丸 武田智継/幸寿 武田應秀

ワキ 宝生常三/間 山本則重

笛 松田弘之/小鼓 鵜澤洋太郎/大鼓 原岡一之

主後見 武田宗和/地頭 武田志房

狂言「二人袴」山本東次郎

舞囃子「百万」坂井音雅

仕舞 山階彌右衛門/観世三郎太

能「天鼓 弄鼓之楽」武田友志

ワキ 福王和幸/間 山本則秀

笛 竹市学/小鼓 大倉伶士郎/大鼓 柿原弘和/太鼓 林雄一郎

主後見 山階彌右衛門/地頭 観世三郎太



公益財団法人
武田太加志記念能楽振興財団
Takashi Takeda memorial nohgaku foundation

表紙写真「屋島」「大原御幸」いずれも撮影 前島吉裕